

7. 左腎癌術後の十二指腸麻痺性イレウスについて

武田英男 (千大)

千葉大泌尿器科において、1983年より1993年までの10年間に手術を行なった左腎癌症例61例中、特異な経過をとった十二指腸の麻痺性イレウスを呈したのは3例あった。その原因として、リンパ節郭清時における胃・十二指腸の運動を支配する腹腔神経節や、腹腔神経叢の損傷が考えられた。今後郭清時には、十分注意が必要と思われた。

8. 自然破裂をきたした巨大腎血管筋脂肪腫の2例

江越賢一, 阿部功一, 佐藤信夫
(船橋市立医療センター)

症例1。患者は58歳、女性。主訴は右側腹痛。CTにて右腎血管筋脂肪腫の自然破裂と診断。貧血進行するため手術施行。腫瘍が巨大なため腎と共に摘出。腫瘍は3kgであった。症例2。患者は33歳、男性。主訴は左側腹痛。CTで両側巨大腎血管筋脂肪腫、左自然破裂と診断。出血性ショック、血腫増大による呼吸・循環不全のため緊急手術施行。正常腎は判別できず腎と共に摘出。腫瘍は4kgであった。右腎腫瘍の治療については検討中である。

9. 重篤な経過をたどった腎血管筋脂肪腫の1例

榎井 眞, 石引雄二, 内藤 仁
(沼津市立)

26歳女性。朝より腹痛続く。腹部超音波検査後、急にショック状態となる。CTにて左腎血管筋脂肪腫の腫瘍内出血と診断。腎動脈塞栓術により出血はコントロールできたが、患側腎の腫大により横隔膜が圧迫され、抜管ができない状態が続いたため、左腎摘出術施行。左腎は腫瘍で占められ、重量は4500gであった。病理所見は腎血管筋脂肪腫であった。

10. 常染色体性優性遺伝性嚢胞腎 (ADPKD) の臨床的検討

安部 陸, 香村衛一
(国立佐倉)

過去に当院を受診した常染色体性優性遺伝性嚢胞腎 (ADPKD) 患者48名 (男性26名, 女性22名) に関して初診科と臨床病態, 各科における治療状況を調査した。その結果, ADPKD 患者は一つの病院の中でも, その時々の臨床病態で受診した臨床科で別々に治療され経過

観察される傾向があった。ADPKD が遺伝的背景を持ち、多彩な病態を生じることを考えると、病院内での統一かつ総合的治療指針が必要と考えられた。

11. 下大静脈腫瘍血栓を伴う腎細胞癌の1例

李 瑞仁, 脇坂正美, 高岸秀俊
(船橋中央)
武藤高明 (同・外科)
宮崎 勝 (千大・1外科)

症例は64歳、男性。尿閉、肉眼的血尿を主訴に1989年3月11日入院した。検査の結果、下大静脈腫瘍血栓を伴う右腎腫瘍の診断で同年4月6日、手術を施行した。

TNM 分類は PT₃N₀M₀Pv₂ であった。術後インターフェロン2年間投与し、4年6カ月経過して、再発、転移を認めない。本症例は Montie らの分類によると、Level IIいわゆる infrahepatic type (腎静脈より2cm以上で、肝静脈下) にあたり、本例を含め、36例集計し、考察した。

12. 尿管エンドメトリオーシスの一例

湯浅譲治, 北川憲一, 村山直人
(松戸市立)

41歳、女性。主訴は左背部痛、発熱。婦人科疾患・手術の既往なし。妊娠歴3回で正常分娩。DIPにて左下部尿管狭窄、左水腎・水尿管症。左RPにて壁不整の陰影欠損あり。ブラシ細胞診は Class 2。左尿管鏡下生検にて移行上皮癌が疑われ、左腎尿管全摘術、膀胱部分切除術、リンパ節郭清術施行。混合型のエンドメトリオーシスであった。本邦56例目と思われる本症例に対し、若干の文献的考察を加えて報告した。

13. 感染性尿管嚢胞の一例

小林洋二郎, 榎鏡年清
(東京船員保険)

症例は50歳女性。主訴は頻尿・下腹部不快感。22歳時虫垂切除術を受けている。下腹部に鷲卵大、弾性硬の腫瘤を触れ、CTにて腹壁から連続する膀胱内に突出した腫瘍を認めた。膀胱鏡では頂部に直径7cmの球状の腫瘍を認めた。膀胱内の腫瘍を経腹的に穿刺したところ膿70mlを吸引し、黄色ブドウ球菌が検出された。尿膜管摘除・膀胱部分切除術を施行した。組織学的には慢性炎症性肉芽腫で遺残した尿膜管組織は認めなかった。